



12月の俳句

(2020年12月)

た べ も の 俳 句	モ ー ロ ク 俳 句	歳 時 記 俳 句	目 次
14 〈	8 〈	1 〈	

12月といえば「師走（しわす）」と、旧暦の呼び方を思いうかべる方も多いかもかもしれません。

「師走」の由来は、僧侶のような普段落ちついて
いる人でも、この月は多忙で走り回るようになる
という意味から名付けられたという説があります。
では、なぜ僧侶は歳末に忙しくなるのかというと、
毎年年末に仏名会（ぶつみょうえ）という法要が
あるからです。

(宇佐美保幸)メール・zeirisi777usami@aol.com

毎日の俳句は次のブログに

巢鴨とげぬき徒然俳句

<https://blog-haiku.777usami.com>

おばさんにそしておじさん十二月

身の丈に合った生活十二月

過疎の村なんとか残り十二月

F Mで昭和の歌を十二月

掃除機がもう疲れたと十二月

パスワード度々忘れ十二月

マスコミも妻も騒ぎ十二月

街に熊かわいい熊も怖くなり

熊の皮雄雌区別難しく

おそば屋の熊の剥製哀れんで

過疎の村ポインセチアはありなしや

赤一色ポインセチアや赤ワイン

ポインセチア白き花びらつけてみよ

ポインセチア鼻水噛めば鼻血かな

怠けるなポインセチアに励まされ

妄想はポインセチアの赤で増し



声明が響くお堂にポインセチア
ポインセチア人生会議誰とする

山茶花や何枚散れば白となる
虚飾ありイルミネーション冬寒し
裸木にイルミネーション虚飾かな

木枯らしに耐えて辛抱自動ドア
木枯らしや無人駅にはただの風
赤提灯木枯らし吹いて高架下
誰にでも嘘は方便木枯らしは

算数も国語も苦手枇杷の花
手袋の親指一つ穴が開き
手袋の片手を外しスマホかな
くだらない雑談ごとく冬の雨
酒尽々いたわり合って冬の雨



師走なり反省多く断捨離を
こりこりと肩こりひどく冬の月
泣いてみて諦めてみる冬の月
雑念と妄想ひどく果ての月
冬の月兎の食べる草あるか
冬満月探査などして夢壊す

ウイスキー魔法をかけて冬の夜
医学書を読みあさりする冬の夜

いつもまたなるようになる冬紅葉
頑張れどついに訪ずる冬紅葉

小便小僧過保護にされて冬帽子
冬帽子子供に返る吾もまた
冬うららお地藏さんに毛糸帽
はにかみて抗がん剤と毛糸帽



千両の実も豊作に年の内
独り者無用の年の内
枕元積み置く句集年の内
東京の初雪未だ年の内

おそろいのマフラーをして同性婚
マフラーしコート襟立て始発バス

千両はすでに実がなし年の内
早々と雑煮を食べて年の内
俳人になったつもり年の暮れ

数え日となりてあわてて年賀状
数へ日の一つ一つの義理果たす

おやすみと言わないままに山眠る
山眠るごとくに手足丸め寝る
山眠る吉幾三を聴きながら



池袋路地の居酒屋年忘れ

柚子湯して宇宙旅行の夢を見て

万病を防ぐと信じ柚子湯かな

庭のゆず贅沢使いゆず湯かな

シヤンプーし心ゆくまで年の湯や

さねかずらコロナに似たり迷惑に

哲学者追憶すればどつと冬

冬枯れの銀座路地裏猫も居ず

ビンビンと頭に響く寒波あり

新しき歯磨きおろす冬の朝

年の暮何はさておきクリスマス

ささやかにピノワールでクリスマス

魚たちサンタ餌やり迷惑な

落葉し庭を彩る梅擬



万両やいつの間にかに実がついて

雪が降るパン屋にパンのスケジュール

雪空の奥はまた雪日本海

雪の夜はベッドに籠もり哲学者

雪女こども追いかけて自動ドア

露天風呂頭にタオル雪が舞う

孤独死もあつて当然しずり雪

カラオケの津軽海峡雪がふる

歳をとり今ぞ輝け実南天

スカイツリー川の面にゆれて年迎ふ

句集など整理整頓年迎う

パソコンのバックアップを年用意

大吟醸二三を選び年用意

ベートーヴェン聴けば今年も年終わる



大晦日やはりスマホが枕元
悩み事今日で終わりに大晦日
大晦日早寝早起き変わりなく

羽子板は値切って買ってお大尽
岩礁を叩きに叩く冬怒濤

東京を裏返してみる十二月
黒マスク皆が鬼かな師走かな



モロク俳句

モーロク少し少し気弱に十二月
 食べて寝てモーロクしたよ十二月
 何一つ出来ずモーロク十二月
 モーロクし何かを口実十二月
 モーロクし夫婦励まし十二月
 モーロクし人の靴履く十二月
 約束を忘れモーロク十二月
 モーロクしかそけし暗し十二月
 モーロクし影も小走り十二月
 モーロクし何も忘れて十二月
 モーロクし空想自爆十二月
 モーロクし昭和なつかし十二月
 モーロクし身の丈合わせ十二月



信じたい信じて冬をモロクし
モロクか一日動かぬ冬の蜂

山茶花のこぼれモロクまた過ぎぬ
冬帽子モロクしても色選び

冬銀河モロクすれば死も親し
モロクし死を測る機器冬銀河
モロクしとろみ食なり冬銀河
モロクし黄昏に冬銀河
モロクし寝返り多く冬銀河
モロクし頬杖ついて冬銀河

モロクし今日の機嫌の粕汁や
モロクし考えもなく蜜柑むく
モロクし屈託もなく蜜柑むく

鍋焼きは小さき地獄モロクす



モーロクし鍋焼きうどん舌を焼く

山眠るモーロクしても忙しい

モーロクの四人兄弟山眠る

山眠る如くモーロクもたれけり

モーロクしカイロふところ愛よりも

モーロクし先考えず落葉かな

モーロクし惰性に生きて落葉焚

モーロクし水洩垂らし情けなし

風邪薬モーロクすれば二三種を

冬の虹モーロクしても寂しけり

モーロクし爪切る今日は冬の雨

モーロクし冬の星座をまなじりに

モーロクしどう過ごすべきまた師走



モ一ロクし思い出ばかり師走かな
モ一ロクし欲しき物なしはや師走
師走来るポキリポキリとモ一ロクす

モ一ロクし脳にたまりし煤払ふ

モ一ロクし愛着しぼむ冬日向

モ一ロクし熱爛少し持て余し

モ一ロクし本音と弱音実南天

過去未来モ一ロクすれどおでん煮て

モ一ロクしそれにも慣れて一人鍋

モ一ロクしおだておだてておでん酒

モ一ロクし段取り悪き冬至かな

ことごとくモ一ロクひどく年の内

モ一ロク身の年内わづかなり

モ一ロクし数え日なれど義理を欠き

混浴のモ一ロク笑顔雪の秘湯



モーロクし平穩平熱クリスマス
モーロクし反応もなくクリスマス
モーロクしされど聖夜の赤ワイン

モーロクし全身緩む根深汁
葱切れば涙もあふれモーロクし
悴んでモーロクすれば噛みしだく

全身で生きてモーロク年の暮れ
この道や淋しモーロク暮の花
モーロクし目薬頼り年逝ける

モーロクしすることもなく空つ風

モーロクしともしびを探し大枯野
モーロクし考え抜いて裸の木





あんパンと孤独モロク窓に雪
くしやみして目眩ぐるぐるモロクし
ストロブの炎ながめてモロクす
モロクし何時もの距離を冬苺
なにはさてモロクしても晦日蕎麦
モロクし明日は何の日晦日蕎麦
難しきこと持ち越して年惜しむ



たべもの俳句

ぷっくりと白子を焼いて十二月
蜂蜜もどんよりこごる十二月
湯豆腐の湯気や今年も十二月

みかん剥きいくつ食べれば反省会
みかん八個ジュースどろりビタミン〇
よくしゃべる女子生徒達蜜柑食べ
腐れ縁みなそれぞれに蜜柑食べ
瀬戸の海黄色の島や蜜柑島
蜜柑むき何を呟く男達

丸々と森を作りしブロッコリー
短日や匂う揚げ物バス車内
大根炊きお布施まさしくぼったくり



味噌汁に七味たつぷり寒き朝
味噌汁も演歌も好きで冬も好き
本物の納豆汁や一手間で

河豚刺身いくら食べてもまた欲す
てつちりを大阪名物紙鍋で

玉子酒菓飲むより夫婦して
卵酒過去未来など夢の中
玉子酒夫婦相伴早寝する

レトルトカレー辛口食べて漱石忌
しばし待て待てずに火傷きりたんぼ

ナポリタン男が作る師走かな
浅草の師走を散歩もんじや焼き
お茶漬けを馳走と思う師走あり
つんときて葱の香まつすぐ師走かな



昨夜鍋今朝は雑炊卵入れ
雑炊を懐かしむ人昭和
雑炊や胃袋感じ生きて
雑炊に卵落とさず何落とす
喧嘩して疲れ諦め雑炊を
雑炊とおじやのあいだ勘違い

大根の白き裸をすりおろす
大根も育ちすぎれば放置され
大根をおろして白し光る渦
大根はおろした後もまた白し
大根は白さを競い土の中
大根を炊いて忘却彼方なり
包丁を磨いて試しに大根を
大根の一本ごとの重労働
スーパードで葉つき大根すぐに買い

自身番二番煎じの熱爛や



干物焼きちびりちびりと寒の酒

白菜のとりとりりの口当たり
道の駅白菜積まれ猫眠る

鶏肝をワインで煮込みおせちかな
鶏肝を赤ワイン煮し十二月
鶏肝をワインで煮込み冬ワイン

闇汁の闇まで食べて腹壊す
照明に照つて脂の鰯切身
しつとりと男の作る鰯大根
粕汁を二人で食べて一人酔い

おでん屋の古きラジカセ八代亜紀
豚足がおでんのエース沖繩は
煮込むほど静岡おでん黒き汁
コンビニで我慢するなりおでん酒



泣いてみるコンビニおでん寂しくて
君の愛おでんの卵大根に
ぶるんぶるん竹輪こんにやくおでん酒

アンコウをつるし切る出刃まず磨く
冬至粥梅干し添えてアクセント
着ぶくれて餃子を包む親娘かな

コップ酒チンして寝酒クリスマス
聖夜にもやはりおそばだ日本人
山盛りのポテトサラダでクリスマス
クリスマス岩塩振って肉料理
ケーキよりどら焼き欲すクリスマス
クリスマス電子レンジにケンタッキー

カツサンド牛豚鶏と冬の雲

あつつつつ雪の日二人常夜鍋



霜の夜^ポン^ン酔にむせる常夜鍋
鍋^囀む今宵は雪と予報あり
寄せ鍋もお一人鍋でコロナ渦や

かに鍋やほぼたらバガニ冬味覚
かに鍋やほぼたらバガニ食べ易し

冷凍の鍋焼うどん孤独なり
鍋焼きの湯気や嬉しき一二月

大吟醸二三を選び年用意
株上がり捕らぬ狸の河豚コース

又例のすき煮うどん^で年を越し

牛豚鶏すき焼きならば同じ味
すき焼きといえ^ば「煮る」「焼く」
すき焼きの汁吸うお麩や十二月
お好みで



すき焼きでジャズ聴きつつ赤ワイン
すき焼きを一年一度霜降りで
すき焼きの匂いぞこれが師走なり
帰省の子いつも定番すき焼きや





